

英米児童文学 —「幸福の王子」

A Study of “The Happy Prince”

貝 嶋 崇

KAIJIMA Takashi

キーワード：英米児童文学・幸福の王子・自己犠牲

はじめに

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) が童話集 *The Happy Prince and Other Tales* を出版したのは、1888 年 5 月のことである。この作品は *A House of Pomegranates* と並んで評価されているオスカー・ワイルドの童話集 1 つとされている。本論ではその中でも代表的とも称される “The Happy Prince” (以下『幸福の王子』) をとりあげてその作成の過程を探るとともに、この童話の持つテーマの問題に触れ、それがワイルド文学の中でどのような位置付けを持っているのかを改めて論考していきたい。また、これが童話文学のジャンルに入っているという点からもこの作品が持つ意味を深く考えていきたい。

童話集の背景

オスカー・ワイルドはなぜこの童話を出したのか。この疑問に答えるためには、どうしても作品が執筆された当時のオスカー・ワイルドへの理解が必要になってくる。具体的には、1880 年代のオスカー・ワイルドである。当時、彼は 20 代後半から 30 代前半であり、まだ代表作とされる演劇や小説などを世に出す以前であり、彼自身にとって、精神的にも肉体的にも最もエネルギッシュな時期だった。また社会的にも充実しており、1883 年 11 月 26 日にはコンスタンス・ロイドとの婚約を発表して、その翌年の 1884 年 5 月 29 日にロンドンで挙式をあげている。その後まもなくハネムーンへ出かけ、フランスのパリと北フランスのリゾート地であるディエップとを訪れている。そのハネムーンから戻って 6 ヶ月後それまで住んでいたグロブナースクエアから内装の豪華さで有名となるタイト・ストリートの 16 番地へと引っ越している。そして続く 1885 年の 6 月 5 日には長男のシリルが誕生している。また 1886 年には次男のヴィヴィアンが 11 月に誕生している。まさに、私的には一つの最盛期だった。

言い換えると、1880 年代の前半から半ばにかけての時期はオスカー・ワイルドにとって個人的にも精神的にも非常に充実した時期であったと言えるだろう。また、家族を持つことで、自分だけではなく家族全体の生活を支える責任を強く感じて、安定した収入と仕事とを真剣に考えざるをえなくなった時期であろう。

当時のオスカー・ワイルドが目指していたものは、大学時代からそうであろうが、いわゆる大詩人になることであるが、その職業は、安定した収入とは縁遠いものであった。ワイルドはオックスフォード大学時代に「ラヴェンナ」でニューディゲート賞を受賞しており、その詩才は公に認められていたといっているが、彼の目指す一流の詩人への道のりはまだかなり遠いものであった。

1881年には『詩集』を発表していたものの、その評価はそれほど芳しくなかったからである。詩人の夢は捨てなかったにしても、その後はもっぱら講演を引き受けることで収入を得るようになっていった。講演のテーマは芸術から生活のスタイル、文化全体に渡ることもあり、特に装飾についてのものもあった。

オックスフォード大学で培った教養と知識を織り込んで、オスカー・ワイルド特有の語りのスタイルでユーモアに溢れパラドックスに満ちた講演を行なったので、聴衆にはとても評判が高かったとされている。当時ワイルドがとても敬愛していた画家のホイッスラーを話題にすることもあった。ホイッスラーはその行動や描く対象が反倫理的であり当時の社交界でいい意味でも、悪い意味でも物議を醸していたので、それをテーマにすること自体注目を浴びるものだった。しかし、ワイルドは、恩師である美術評論家のジョン・ラスキンに対する敬意も忘れてはいなかった。彼の講演は評判を呼びイングランドのみならずアイルランドやスコットランドでも数多くの依頼があり、1885年にエジンバラで行われたその最終講演では当時スコットランドの高名な名士であるハンター・ブレアを壇上に招き上げ、親密な呼名で彼に呼びかけ、壇上で跪いてどうか自分のために祈ってくださいとされる。このことは彼の伝記にも有名なエピソードとして残っている。

無論オスカー・ワイルドは、ペーターやラスキン仕込みの当時としては非常に斬新で高度な芸術論についても熱弁を振るっていたが、当時の雑誌などには、講演の内容よりもむしろ彼の着ていった服装や、講演の中に散りばめられる警句などだけが面白おかしく取り上げられた。最初はそうした扱いをするジャーナリズムをワイルドはとても嫌悪しており、また同じように逆に雑誌はワイルドを軽蔑する論調で話題を盛り上げた。そのように雑誌とワイルドの関係は犬猿の仲であったが、最終的には雑誌もオスカーワイルドの言説を認めて、論評を署名記事で雑誌に投稿するように依頼をするまでになった。

こうして着々とワイルドは、講演家から雑誌の署名入りの論評を書く評論家へと転身していった。しかしながら、ワイルドの雑誌の投稿も長くは続かなかった。リチャード・エルマンは、それについて以下のように述べている。

Writing about other people's books and plays and lectures, and talking about art, could not satisfy for long the ambitions of which he had boasted to Sherard at the time of Rennell Rodd's disaffection. Nothing else was available at the moment, he and Constance must eat, and eat as well as possible. He abounded in vitality and expectations.¹

またワイルド自身も以下のように述べている。

Now that I agree with everything I have said in this essay. There is much with which I entirely disagree. The essay simply represents an artistic standpoint, and aesthetic criticism, attitude is everything. For in art there is no such thing as a universal truth. A truth in art is that whose contradictory is also true. And just as it is only in art-criticism, and through it, that we can apprehend the platonic theory of ideas, so it is only in art criticism, and through it, that we can realize Hegel's theory of contraries. The truth of metaphysics is the truth of masks.²

芸術には普遍的な真理もなく、特にその逆も真なりというワイルドのパラドックスは、当然のことながら当時の社会では受け入れられるものではなく、そのこと自体も、ワイルドは理解していたのだらうと思われる。しかしそうした事情を物ともせず、オスカー・ワイルドはジャーナリズムの世界へとデビューすることになった。それも家族を支えるためという事情があったのである。

先にも述べたが、雑誌『ペル・メル・ガゼット』をワイルドは当初嫌っていたが、後に皮肉にもその雑誌が彼の記事を求めるようになっていた。その雑誌の推薦で、ワイルドは *The Woman's World* という雑誌の編集長を 1887 年には任されることになった。

The Woman's World の前身は、*The Lady's World* という雑誌で、『ペル・メル・ガゼット』の GM をしていた Wemyss Reid が 1886 年に手がけていた中流階級の婦女を対象にして発行されていたもので、そのテーマは、主に上流階級のファッションや流行に限ったものだった。ワイルドは 1887 年 4 月にその契約に署名したが、その後雑誌の名称を変更するように要求した。そして、読者の対象を単なる婦女ではなく、教養のある巫女を対象にしたものに変えて、それに合わせて、雑誌の取り扱うテーマも、ファッションだけではなく、社会的なものも含めることにした。そして、その雑誌を、“The first social magazine for women” と定義したのである。

記事もファッションばかりを扱うのではなく教育や政治社会、また有名な女流作家や女流芸術家の詩や評論を掲載するようにしたのである。その抱負としてワイルドは以下のように述べている。

Serious articles about women in education and politics accompanied style and society notes, short fiction and poetry and biographical pieces on famous, usually aristocratic, women. The Woman's World addressed an elite, but expounding relationship of middle and upper class educated women with literary and social credentials.³

ここに見られるのは、名前の言及こそないものの、ワイルドの母である Lady Wilde の存在である。この言説はレディー・ワイルドとも一致したものであることがよくわかる。女性を社会の構成員の 1 人として見なす一方で、女性の意見というものを広く社会に知らせめと言う社会的な役割の一部をこの雑誌で背負うという表明は、当時としては斬新なものだった。この新生の雑誌には母親とも関係の深かった、当時のルーマニア女王も寄稿しているし、なんとビクトリア女王にも詩を発表するようにワイルドは求めたが残念ながら断られている。こうして、当時としては新しい切り口の雑誌でワイルドは、自分なりの社会改革を望んでいたようである。また、ワイルド自身も編集長として文学欄や読者欄を担当した。しかしながらワイルドは雑誌編集への興味を急速に失い、編集会議にも姿を表さなくなった。読者欄を担当していたときに、読者からのクレームが相次いだためとも思われるが、その真偽は分からない。ただはっきりしているのは、こうした雑誌との関わりから、その後になって、童話集が発行されるようになったという事実である。

幸福の王子出版

『幸福の王子とそのほかのお話』が出版されたのは 1888 年 5 月のことである。ワイルドがこの童話集について述べた言葉がある。

Studies in Prose, put for Romance's sake into a fanciful form: meant partly for

children, and partly for those who have kept the childlike faculties of wonder and joy, and who find in simplicity a subtle strangeness.⁴

しばしば批評家の間では、ワイルドがこの童話を誰のために書いたのか議論になっていたが、当時のワイルドの言葉からもうかがえるように、単に自分の子供のために描いたのではなく、また、子供のためだけに書かれたものでないということがよくわかる。子供のような心を持った大人にも理解しやすいように童話という形を借りて、物語を書いたのだというのだ。

最初にこの「幸福の王子」について言及があるのはケンブリッジでのことである。

It was during his visit to Cambridge for *Eumenides*, that Wilde was prompted to entertain his young friends with a story. His having the child perhaps made the story take the form of a fairytale, though Civil was as yet too young to listen. He would call it later “The Happy Prince,” and It was so well received by the Cambridge students that all returning to his room he wrote it down. “The Happy Prince” turns on the contrast, used in some of his later writings too, of an older, taller lover with younger, smaller beloved. In this case the rolls are played by members of different species and even different orders of existence, for the prince is a statue and the beloved a swallow.⁵

このケンブリッジでの集まりはエルマンによると 1885 年 11 月である。この引用には、長男のシビルが生まれたことが引き金になって童話という形式を用いてストーリーを皆に聴かせたとある。このストーリーがのちの幸福の王子の誕生となるというわけである。しかしここに書かれた子供が生まれたから書いたという動機はエルマンの勝手な解釈によるものであり、この英語の文章にもあるように、たぶん (perhaps) なのである。したがってその確証がないということをエルマン自身が認めており、童話という形式にしたことに関しては、時期的に子供が生まれたという事も影響したと思われるという程度に考えたほうがいいだろう。

この童話は、Walter Crane と Jacob Hood が挿絵をつけていて、出版されると大変好評だった。1 部の雑誌は、ワイルドの童話をアンデルセンの童話と比べてもひけをとらないと述べ、また『サタデイレビュー』に至っては、すばらしいと言った後で、アンデルセンのものと違う理由はこの童話には大人を喜ばせるある特質、すなわち、上質なアイロニーがそこにあるからであると述べている。出版されてまもなく、すでにこの童話に対する本質的な批評が雑誌から公表されていることは、この作品がとてもわかりやすいということを意味していると同時に、作者オスカーワイルドの目論見が見事に成功していると言えるのではないだろうか。

「幸福の王子」のテーマ

「幸福の王子」のテーマとして、3 つのことが考えられる。1 つは自己犠牲、そして 2 つ目は、プラグマチズム批判、そして最後にイエスの救いの問題などが考えられる。1 つ目の自己犠牲とは、単に幸福の王子の像そのものだけではなく、その行為を手伝ったツバメの自己犠牲も大きなテーマとなるであろう。また 2 つ目のプラグマティズム批判については、最も象徴的なものは、教会の屋根にあるカザミドリである。これは芸術作品ではなく、雄鶏の形をした風力風向計であるにもかか

わらず、登場人物にそれが美しいと言わせている。役に立つものは美しいという考え方であり、19世紀末のプラグマティズムに対する盲目的な信仰を真っ向から批判していると思えてもいい。また3つ目は宗教の問題である。最後に天使が最も尊いものとして2つのものを神様から持ってくるように命じられた時に、彼がハコンダものは幸福の王子の心臓とツバメの死骸であった。この3つのテーマは繰り返しオスカーワイルドの他の作品の中にも登場しているところから考えれば、ワイルドにとっては本質的なテーマとしてそれを考えていたと想像される。

次には自己犠牲のテーマについてであるが、本論においては紙面上の関係もあり、最も中心的に取り扱ってみたい。先にも述べたように、幸福の王子の像とツバメの2つの自己犠牲からこの物語が成り立っている。まず幸福の王子の像の自己犠牲について考えてみよう。幸福な王子はこれまで、無憂宮と呼ばれる天国のようなところで、悲しみを全く知らず育っていった。悲しみや憂いのない宮廷では、喜びに支配され人々は幸せに生きていた。

“When I was alive and had a human heart,” answer the statue, “I did not know what tears were, for I lived in the palace of Sans-Souci, where sorrow is not allowed to enter. In a daytime I played with my companies in the garden, and in the evening I led the dance in the Great Hall. Round the garden ran a very lofty wall, but I never cared to ask what lay beyond it, everything about me was so beautiful.”⁶

幸せの国で何の憂いもなく生きている王子の様子が描かれているが、ひとつ気になる存在として注目したいものがその宮廷を取り巻く非常に高い壁である。宮廷の鮮やかで装飾に満ちた人に優しい建築とは裏腹に、人を遠ざけて寄せ付けぬ高い壁の存在は際立って異様であるが、それ故に外の異なった世界を内部へと侵入させない機能を果たしていた。その為に、王子の周りのものはすべて美しいものであった。

しかしながら、幸福の王子が亡くなって彼は銅像と姿を変え、町を見下ろす高い台座の上に据えられ壁の外が見えるようになって初めて、王子には悲しい不幸な外の世界が実際に見えてくるのである。

And now that I am dead they set me up here so high that I can see all the ugliness and all the misery of the city, and though my heart is made of lead it yet I cannot choose but weep.⁷

それ以降王子の目に入るものはすべて、これまで宮廷で見聞きしていたものとは全く異なったもので、しかもその様子をただ傍観する以外には、王子にはなす術がなかった。銅像になってからの王子は、まさに生き地獄のような外の出来事をその街全体を見下ろす高台で傍観者として眺めるしかなかった。王子の両足はしっかりと台座に固定されていたからである。優しい心を持った王子は行動を起こそうと努めたが何もできなかった。その無力な自分に対して深い絶望感を抱いていたのではなかろうか。

一方でその宮殿の高い壁の向こうには、宮殿の内部にいる人々の幸せを支えるために、日々苦しい労働をして涙を流しながら働く貧しい労働者たちの生活が展開していたのである。その具体的な貧しい労働者の例として登場するのがお針子の家族、マッチ売りの少女、と貧しい劇作家である。

この人々を救うために、幸福の王子は偶然通りかかったツバメに声をかける。音楽的な声で、幸福の王子はツバメに以下の通りに説明する。

“Far away,” continued the statue in the local musical voice, “far away in the little street there is a pool house. One of his windows is open, and through it I can see a woman seated at the table. Her face is thin and worn, and she has coarse, red hands, all pricked by the needle, for she is a seamstress.”⁸

子供にも分かりやすい口調で、抽象的に貧民街の一軒家を描いている。また今度は具体的にお針子の痛みを彼女の手を詳細に描くことで表現している。そしてこの母親のかかえた病気の息子の存在は幸福の王子のような年齢で一層共感を感じたに違いない。

この母親が手を真っ赤に染めて刺繍していた花は *passion flower* であり、イエス・キリストの受難を意図的に暗示させている。またこのお針子が刺繍している服は自分が以前に主催していた宮廷舞踏会のためのものと認識することで、ますます幸福の王子は自分の周りにあったすべて美しいものが、実はお針子のような苦労を抱えた貧しい者たちの手によって紡ぎ出されていたことを改めて思い知らされるのである。当然のことながら、これまでの幸せは本物であったのかと王子は自問したに違いない。

その贖罪の意味を込めて、王子は自分の身の回りの金銀宝飾をその貧しい者たちに誰から言われるでもなく与えようとする。果たしてこれは自然な行為なのだろうか。リアリストは少なくとも同意しないだろう。自分1人の宝をすべて手放したにせよ、町のすべての貧困の解消にはならないということをリアリストは知っているからだ。むしろそれは彼らには自己満足にみえる。しかし、この行為が命を賭した痛みを伴う自己犠牲であるなら、あながち自己満足とリアリストが軽蔑することもできないであろう。そうした命がけの自己犠牲には無償の人間愛が存在するからである。われわれはそのような自己犠牲を決して簡単には批判することはできない。

しかもこの無償の愛に満ちた自己犠牲が友情というものをベースに展開していくのも「幸福の王子」の特徴の1つである。

ツバメの自己犠牲

幸福の王子と幸福の王子の自己犠牲を通じて友情を深めたものとして、この童話の構成に欠かせない登場キャラクターとしてあげられるのがツバメである。ツバメは河畔に咲く葦に恋に落ち、仲間とはぐれ、南国のエジプトに行くのが遅くなっていた。その途中に偶然立ち寄ったのが、幸福の王子の像の下であった。その幸福の王子から、町の事情をきかされたツバメは、幸福の王子のメッセンジャーになることに同意した。最初は、軽い気持ちで引き受けたものである。しかし何とかメッセンジャーを務めるにしたがって、ツバメは幸福の王子の自己犠牲に共感し、自分もまた命を賭けて幸福の王子のメッセンジャーとしての職務を遂行する決意を固めていった。

まず引き受けた仕事は、先に述べたお針子に、剣の柄に埋め込んである赤いルビーを届けるというものである。届けに向かう途中で、ツバメは幸福の王子の感じた貧困の悲惨な現状を空から再確認した。

He passed over the Ghetto, and old Jews bargaining with each other, weighing out money in copper scales. At last he came to the poor house and looked in. The boy was tossing feverishly on his bed, and the mother had fallen asleep, she was so tired. In he hopped, and laid the great ruby on the table beside the woman's nimble. Then he

flew gently round the bed, fanning the boy's forehead with his wings. "how cool I feel!" said the boy, "I must be getting better:" and he sank in the delicious slumber.⁹

ツバメは幸福の王子の贖罪行為を手伝う過程で、自らも自己犠牲の尊さに気づいてしまった。その不思議な高揚感を味わったツバメはその後も繰り返し幸福の王子のメッセンジャーを務めながら、幸福の王子の自己犠牲を手伝いながら、自らも自分で自己犠牲を実践し、無償の愛を貫くことになる。その理由は、自らツバメが自己犠牲の持つ意味を体で感じたからである。最初のメッセンジャーとしての仕事で、外は寒くなっているのにも関わらず、自分の体が暖かくなっているのに気づいたのである。もちろんツバメも他人に善行を行うことで、まったくその見返りは求めなかった。だが不思議な幸せを感じていた。気持ちの問題とみれば、それはそれだけのことであるかもしれないが、実はそこに作者オスカー・ワイルドが狙った大きな仕掛けがある。自己犠牲は無償の愛であり、自己の利益になることはないのであるが、それは経済的、社会的な価値観に基づくものであり、精神的には自分にも大きな利益もたらすものであるということをパラドキシカルに表現していると思える。自己犠牲は悲劇的な結末をもたらすが、同時にそれはどんなものでももたらすことが不可能な新たな高次元の幸福感をもたらすのである。

自己犠牲と幸福

先程も述べた通り、自己犠牲というテーマは、オスカー・ワイルドの他の作品にも繰り返し登場する。すぐにそれとわかる初期の詩や演劇作品も多い。いずれも自分を犠牲にして愛するものを救おうとするものである。無論これはオスカー・ワイルドに限られた話ではないが、19世紀の唯美主義者としてワイルドを解釈し論じる場合には、いささか自家撞着に陥る危険がある。一方では近代人としての自我を持ちながら、また一方ではロマン主義者のようなストーリーに固執するのは矛盾に見える。

オスカー・ワイルドと自己犠牲という二つのものを合わせて考えただけでも、童話の中に出てくるように多面的な理解が必要となってくる。狭義に自己犠牲を捉えてみるとワイルドの場合は、イエス・キリストの自己犠牲と密接に関連づけることも可能だ。批評論の中でも、オスカー・ワイルド自身がそのことによく言及しているからでもある。自ら聖書を最大の文学だと評価したことさえもある。イエスの自己犠牲の精神はオスカー・ワイルドの精神的な基軸を構成していたと断言することもできるだろう。

「幸福の王子」の意図

オスカー・ワイルドはこの「幸福の王子」をどのように捉えていたのであろうか。その疑問を解く手掛かりが1888年7月のレナード・スミザーズ宛の書簡に現れている。

My dear sir, I must very sincerely thank you for your charming letter, and am glad to think that "The Happy Prince" had found so sympathetic an admirer, so gracious a lover. The story is an attempt to treat a tragic modern problem in a form that aim at delicacy and imaginative treatment: it is a reaction against the purely imitative character of modern art—and now that literature has taken to blowing loud trumpets I

cannot but be pleased that some ear has cared to listen to the low music of a little reed.¹⁰

ここにオスカー・ワイルドが「幸福の王子」を執筆した真の意図があらわされていると言っているだろう。まず、第一に注目すべきことは、童話の表現が「悲劇的な近代の抱える問題」を「金属的に高い音を立てるトランペット」で表現するのではなくて、オーボエやクラリネットなどの「リード」の軽い低音で表そうとしたのだと述べているところである。また、エリクソンによれば、オスカー・ワイルド自身が「幸福の王子」をこの童話の中で最高のできであると思っていたというのである。¹¹

本論では今回紙面の都合で触れないけれども、単純なストーリーや自己犠牲と言うテーマだけではなく、この童話の持つ音楽的な文体にもこの童話の魅力を支えるものが見られるという主張までも同じ箇所において、エリクソンは述べている。また、ほかにも芸術とプラグラティズムの関係や、装飾に関する芸術的な考察など、この童話の魅力の解明にはほかにも多くの論ずべき問題が含まれているということをわれわれは再確認すべきだろう。

「幸福の王子」とその後のオスカー・ワイルド

では最後になるが、「幸福の王子」をオスカー・ワイルドの文学の中でどのように捉えるべきなのだろうか。自己犠牲というテーマで考えた場合、オスカー・ワイルドの演劇の処女作である『ニヒリスト、ヴェラ』から始まり、最終的な書簡集、一般には『獄中記』として知られているものの中にも、また最後の代表的な詩となった『レディング獄のバラッド』の囚人が殺人を犯す動機にも密接な関係が見られる。すなわち、オスカー・ワイルドが生涯にわたって追いかけたテーマが自己犠牲であると言えるだろう。

しかし先にも述べたとおり、「幸福の王子」の重要性はそればかりではない。それは「幸福の王子」の執筆によってオスカー・ワイルドの仕事の視野が広がっていったということが、「幸福の王子」という作品の果たした大きな機能であると言えるだろう。

「幸福の王子」を書くまでのオスカー・ワイルドは、もっぱらジャーナリストとして、社会に対して文学を含む斬新な評論を展開し発表してきた。時には非常に刺激的で、インモラルに思われるような言説も含まれており、無名より悪名高いほうがいいという、オスカー・ワイルド自身のモットー通りの態度で執筆する態度が見て取れる。無論、そうした偽悪的な態度で評論を執筆することで、自分の名前を有名にしようというしたたかな目論見がないわけではなかったろう。そうした態度が全く姿を消したように思われるのがこの童話なのである。

偽善性の見えない「幸福の王子」の成功がオスカー・ワイルドには一体何をもたらしたのだろうか。リチャード・エルマンはこう述べている。

His reputation as an author dated from the publication of *The Happy Prince and Other Tales* in London in May 1888. The *Athenaeum* compared him to Hans Christian Andersen, and Peter wrote to say that 'The Selfish Giant' was 'perfect in its kind,' and the whole book written in 'pure English'—wonderful compliment. The stories suffer from florid figures (the long grey fingers of dawn clutching of the fading stars') and Biblical pronouns. The incidents often begin with disfigurement and end, like 'The Happy Prince,' in transfiguration.¹²

The Athenaeum という雑誌は Charles Wentworth Dilke が編集をした格調高い文芸雑誌で 1829 年から刊行されていたものである。そのような高踏派の文芸雑誌にワイルドの童話がアンデルセンの童話と匹敵するとまで激賞されている。また当時を代表する一流の美術評論家であり、オックス・フォード大学の美学の教授であるウォルター・ペーターからも、この童話がパーフェクトな英語で書かれているとまでも賞賛されたのである。

自信を持って世に出した『詩集』の出版直後には、それが盗作集であるとまで酷評するものもあり、オスカ・ワイルドは文学的な才能を持ちながらも、全く自信を失っていた。従って、この作品の発表によって どれほどの自信を取り戻したのかは計り知れない。そして、この作品の成功を皮切りに、のちに代表作の 1 つとなる『ドリアン・グレイの肖像画』に着手することになる。

童話という児童文学については、スミスは以下のように述べている。

たとえば、子どもの問題は、おとなの問題よりも単純だが、同時に、大人の問題よりもはるかにずばりと事物の核心につきる。おとなは、真偽、善悪、幸不幸、正不正のような道義的な問題を、いろいろなところに当てはめてとやかく言いたがるものだが、子どもは、それらのものの抽象的な区別を、理屈抜きで感じ取ってしまう。そして、優れた子どもの本は、問題の取り扱い方が、ずばりと明快である。価値判断が、健全で直截である。しかも、これらの問題がお説教で語られずに、むしろ作品の内側に暗に含まれている¹³。

スミスのいう通りに、童話というものは、本来こども向けのものであるが、実はそこに理屈抜きの判断、子供の直感に訴えるものがある。ワイルドは偽悪的な態度をあらため、分かりやすいしかも、子供のような判断基準で、自己犠牲という重いけれども自ら避けては通れないテーマを取り上げ、大人の価値判断を理屈抜きで訴えた。それがワイルドの童話の持つ「言葉」そのものになった。だからこそ、もし、言葉の価値を理解し、その言葉の音楽性を最大限に高め、最も美しく聞き取りやすい言葉で表現された童話があるとすれば、それは子供や大人という垣根を越えて、1 人の人間の耳に、ある時は交響楽のように、ある時はフルートのソロのように直接働きかけ、その人の心に、価値判断のような理屈抜きに、訴えかけることができたのである。「幸福の王子」は、そのような童話である。

注釈

¹ Richard Ellmann, *Oscar Wilde*, Penguin Books, London, 1987, p. 250.

² Oscar Wilde, *Intentions* より

³ Stephanie Green, "Oscar Wilde's The Woman's World," *Victorian Periodicals Review*, 30 (2), p. 102-120. JSTOR 20082978 (<http://www.jstor.org/stable/20082978>)

⁴ Donald H. Erickson, *Oscar Wilde*, Twayne Publishers, Boston, 1977, p. 59.

⁵ Richard Ellmann, *Oscar Wilde*, Penguin Books, London, 1987, p. 253.

⁶ Oscar Wilde, *Complete Works of Oscar Wilde*, Collins, London and Glasgow, 1990, p. 286.

⁷ Ibid., p.286.

⁸ Ibid., p.286.

⁹ Ibid., p.287.

¹⁰ Oscar Wilde, ed Rupert Hart-Davis, *The Letters of Oscar Wilde*, Rupert Hart-Davis Ltd., London, 1962, p. 221.

¹¹ Donald H. Erickson, *Oscar Wilde*, Twayne Publishers, Boston, 1977, p. 61.

¹² Richard Ellmann, *Oscar Wilde*, Penguin Books, London, 1987, p. 282.

¹³ L.H. スミス, 石井桃子他訳『児童文学論』岩波書店, 2001, p.10.

参考文献

Beerbohm, Max. *Letters to Reggie Turner*, 1964.

Douglas, Lord Alfred. *Oscar Wilde and Myself*. New York, 1914.

Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. London: Penguin Books, 1987.

Erickson, Donald H. *Oscar Wilde*. Boston: Twayne Publishers, 1977

Holland, Vyvyan ed. *Complete Works of Oscar Wilde*. Collins, London and Glasgow, 1948.

Hyde, H. Montgomery. *Oscar Wilde*. New York, 1975.

Mason, Stuart. *Bibliography of Oscar Wilde*. London: Bertram Rota, 1967.

Nassaar, Christopher S. *Into the Demon Universe: A Literary Exploration of Oscar Wilde*. New York: Yale University Press, 1974.

O'Sullivan, Vincent. *Aspects of Wilde*, 1936.

Pearson, Hesketh. *Oscar Wilde: His Life and Wit*. New York: Harper & Brothers, 1946.

Ransom, Arthur. *Oscar Wilde: A Critical Study*. 3rd ed. London: Methuen and Co. Ltd., 1913.

Roditi, Edouard. *Oscar Wilde*. Norfolk, Connecticut: New Direction, 1947.

San Juan, Jr. Epifanio. *The Art of Oscar Wilde*. Princeton: Princeton University Press, 1967.

Sherard, Robert. *The Life of Oscar Wilde*. London: T. Werner Laurie, 1906.

スミス L.H. 石井桃子他訳『児童文学論』岩波書店, 2001.

Symons, Arthur. *A Study of Oscar Wilde*. London: Charles J. Sawyer, 1930.

Winwar, Frances. *Oscar Wilde and the Yellow Nineties*. New York: Harper and Brothers, 1940.